

ナシを加害するカメムシ類に対する防除薬剤の残効期間						
[要約] <u>カメムシ類防除薬剤の残効性</u> は降雨の影響を受け、 <u>降水量</u> の少ない年は残効が長く、多い年は残効が短くなる。また薬剤によって残効性に大きな差がある。						
長崎県果樹試験場・病害虫科	専門	作物虫害	対象	果樹類	分類	指導
平成7年度長崎県果樹試験場業務報告						

[背景・ねらい]

ナシを加害するカメムシ類は4月下旬以降、越冬場所から飛来し、幼果を吸汁加害する。また、8月以降はヒノキ、スギ等の稔果で増殖したカメムシ類がナシ園に飛来し、果実を吸汁し被害を与える。カメムシ類の防除は薬剤防除が主体となっているが、いずれの時期においてもナシ園外から飛来するため、防除は困難であり、薬剤の残効性を考えて実施する必要がある。

そこで、カメムシ類の数種の防除薬剤の特性と残効性に関する要因を明かにした。

[成果の内容・特徴]

- ①カメムシ類の防除薬剤の残効性に影響を与える要因の1つとして降雨がある。降水量の少ない年は残効が長く、多い年は残効が短くなる傾向であった。
- ②降雨のない条件下で、マブリック水和剤、アグロスリン水和剤の残効が最も長く、2週間程度であった。アディオン水和剤、ロディー水和剤、テルスター水和剤、スミロディー水和剤はこれより劣り、スミチオン水和剤は1～2日程度の残効しかなかった。

[成果の活用面・留意点]

- ①早期発見、早期防除に努め、薬剤散布後の降雨と薬剤の残効性及びカメムシの飛来状況を考えて、次回の薬剤散布を行う。

[具体的データ]

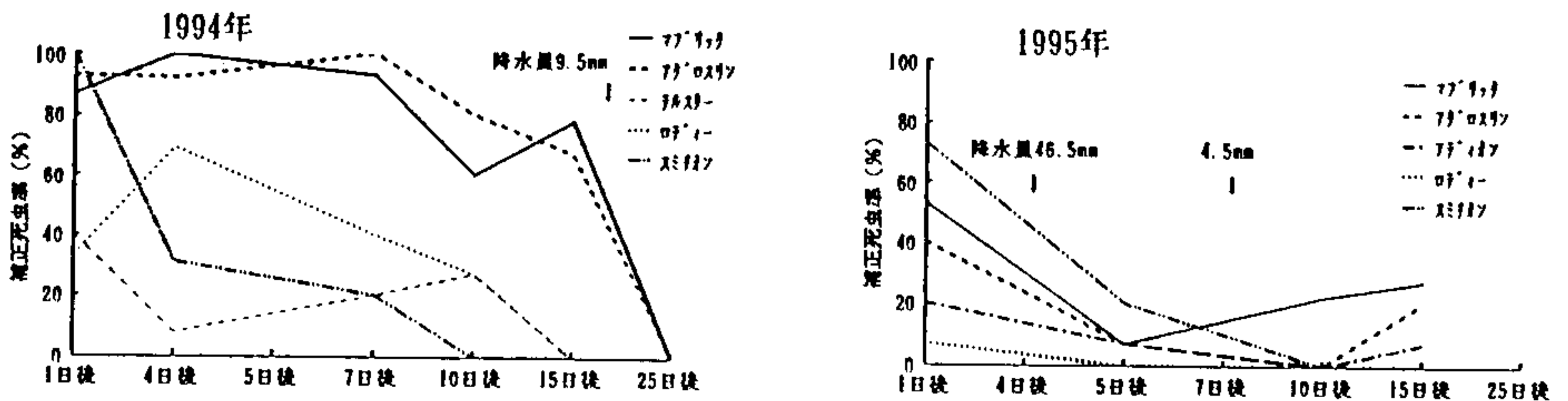


図1 チャバネアオカメムシの死虫率の変化

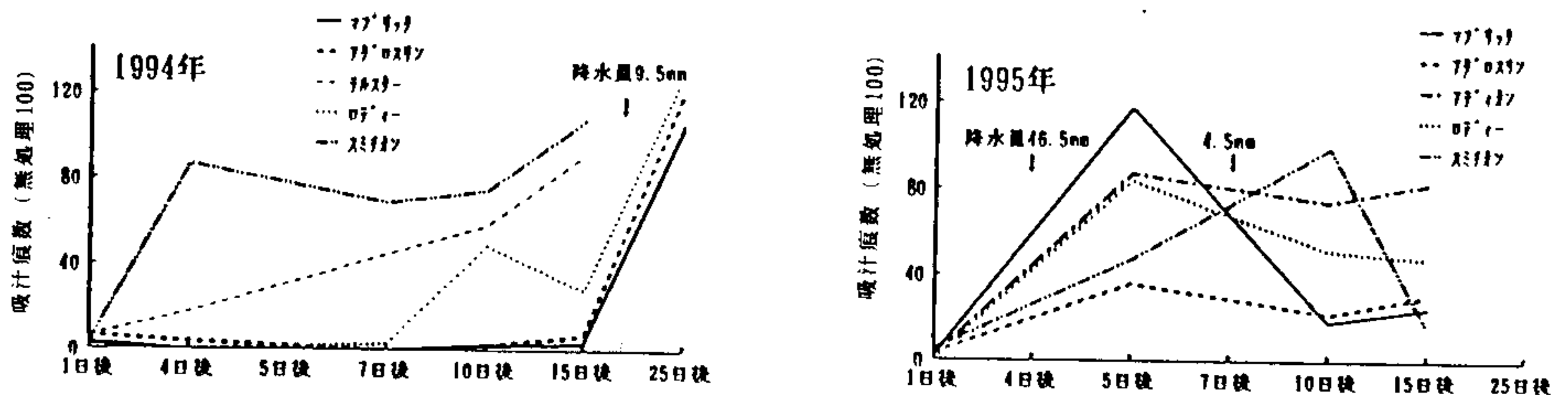


図2 チャバネアオカメムシによる吸汁痕数の変化

[その他]

研究課題名：落葉果樹の重要病害虫防除法

予算区分：委託

研究期間：平成6, 7年度

研究担当者：早田栄一郎、大久保宜雄

既発表論文等：平成6, 7年度 長崎県果樹試験場業務報告

残された問題点：なし